



森本千絵

印刷でコラージュする

■
プリンティングディレクター
渡辺 孝

■トライアルの背景

私にとって「おいしい」とは、もちろん食べものにも感じるのですが、ふと目にした美しいものや人との出会い、旅先でのうれしいできごと、海や山などの自然の雄大さなど、あらゆるものごとを形容する言葉でもあります。

そうした日々の生活で見つけた「おいしさ」を、毎日、新聞にコラージュしています。私が見聞きしたり、体感したこと。つまり、体と心の両方をいっぱいに使って消化したその日の「おいしい」できごと。「ごちそうさま」の後ともいえる1日の終わり、いろいろな材料や画材を使い、日記を書くようにその日に発行された新聞にコラージュしていくのです。

この「新聞コラージュ日記」を始めたのは、昨年起こった東日本大震災の後からでした。「忘れられないものをつくりたい」という思いが、それまで以上に強くなったのです。どんなに忙しくても、旅先であっても、毎日欠かさずにつくっています。

日記には、その日の記録という性質が多分にあります。このコラージュは単なる日々の記録だけにとどまらず、私のそのときの気持ちも表現したものであり、後で見返したときに五感で感じられて、そのときどきの空気や気分が湧き上がってきて、まるでその日に戻ったような追体験ができます。

コラージュという手法自体は今までのお仕事でも用いたことがありますし、私にとっては昔から身近な表現手段です。コラージュには、平面でありながら立体作品のような実体感があります。それに、文字を書いたり、紙を切り貼りしたりする「手を動かす」という行為は、自分のなかから浮かび上がってくる感情をダイレクトに反映させられるような気がしています。実際に手を動かすことでしか見えてこない、自分のなかにひそんでいた

イメージ。そうした気づきが得られるところにも、面白さを感じています。

■制作コンセプト

今回は「新聞コラージュ日記」をメインに、これまでにつくったコラージュ作品をモチーフにしてトライアルに取り組みました。さまざまな印刷技法をコラージュの素材に置き換える、「印刷によるコラージュ」です。

私自身はどのような印刷技法があるのか、それほど詳しいわけではありませんでした。そこでプリンティングディレクターの渡辺さんにコラージュ作品を見ていただき、「なにができるのか」を見つけてもらいながら進めていきました。たとえばフォトグラファーの方にお仕事を依頼するとき、コンセプトやラフで大筋を伝え、細かい画づくりはご本人にゆだねるような感覚です。

モチーフにしたコラージュ作品は、それぞれまったく異なる表情をもっています。一つひとつの空気感や質感、コラージュの積層感を、印刷でどのように再現できるのか追求しました。

■トライアルの経過

「新聞コラージュ日記」はそのときに手元にある材料や画材を使ってつくることにしていて、日によって材料がばらばらです。はがきやステッカー、毛糸や麻のひも、列車の切符……。画材も筆にクレヨン、色鉛筆など、本当にさまざま。それらのあらゆる材料を1枚の新聞紙に乗せているので、印刷物になった際、各モチーフがどのような見え方をするのか、とても興味深かったです。

トライアルがスタートしてからは、コラージュをつくるときに「これを印刷したらどうなるだろう?」と意識するようになり、新たな楽しみが生まれました。

森本千絵

MORIMOTO CHIE

printing director: WATANABE TAKASHI

1

コラージュ独特の積層感をつくる

被膜の薄いオフセット印刷のインキ。テクスチャーを変えたり、重ね刷りをすることで、コラージュを織りなす材料の素材感や重なりを表現するための方法を検証した



コラージュ作品はスキャナーによる取り込みとカメラによる撮影で見え方を比較。より立体感が出たカメラ撮影を選択し、原稿とした

透明な用紙に両面から刷り、
絵柄に厚みを出す

透明なフィルム状の用紙に表裏から刷り、素材の積層感の表現を目指した。線数*1は300線にしたことでコラージュに用いた紙の破れたニュアンスなど、細かいディテールまで再現できている。用紙はアリンダ、インキはKaleido*2のプロセス4色、オペークホワイトを使用。



クレヨンで描かれた線など、白い部分にはオペークホワイトを重ねて質感を与えた



ピンク色の部分は裏面から刷っている。表面から刷った部分よりも奥行きを感じさせる

メタリックな用紙に刷り、
テクスチャーを再現する

銀色の紙や緩衝材の乱反射するような光沢を出すために、用紙はオフメタルNを選択。インキはKaleidoのプロセス4色、オペークホワイト、グロスニス*3。オペークホワイトは部分的に6回刷りしたことで立体感が増した。最後にグロスニスを重ね、ツヤを出している。



視覚でその質感を想像できる緩衝材。用紙と色調のコントラストだけで立体的に見える



魚の目の周りの白い部分はオペークホワイトを6回刷りし、白さを際立たせている

*1 線数 | 1インチあたりの網点の列数を示すもの。単位は「線」、または「lpi (line per inch)」。線数が多いほど緻密な再現が可能だが、用紙の影響などがあるため線数が多いほど高品質な仕上がりにとは限らない。現状では175線が主流。

*2 Kaleido | 東洋インキが開発した広演色インキ。従来のインキに比べて色の再現領域が広く、「鮮やかなグリーン」「にごりのないパープル」など、印刷再現が難しかった色調が再現できることが特徴。

*3 グロスニス | 光沢のあるニスのこと。主に表面加工に用いられ、インキを刷った上に重ねることで印刷面に光沢を与える。また、インキの皮膜を保護する働きがあるため、キズがつきにくくなるという効果もある。

さまざまな材料や画材の
質感の表現を検討する

多種多様な材料や画材が用いられたコラージュ。それぞれの風合いを出すために、インキの種類や刷り重ねる回数などを検証した。右の右上2点で使用したインキはKaleidoのプロセス4色、オペークホワイト、特色ブルー、特色ブラック、超光沢メジウム*4。下段2点はこれに加え、特色蛍光イエローと特色ブラックを1色追加。用紙は新聞紙に近い風合いのCFホワイトSP。インキの発色を良くするため、プロセス4色は2回刷りしている。ここで注目したのは森本氏自身の思いが語られている部分。コラージュを俯瞰して見ると特に印象に残るパーツでもあり、そこを中心に据えて印刷設計を行った。たとえば森本氏の言葉がつづられた手書き文字は別版をつかって特色ブラックで刷り、色の濃さを増すことでメッセージ性を高めている。



湖に浮かぶ豆腐というユニークなモチーフ。オペークホワイトに超光沢メジウムを重ねた



コラージュに貼られていた丸型のシールはオペークホワイトを6回刷り。厚みが出ている



新聞紙からポストカードにわたって描かれた山。超光沢メジウムが質感に差異を与えた



クレヨンで描かれた蝶。特色蛍光イエローにオペークホワイトを20%混入した

実物のコラージュ作品はさまざまな種類の紙や素材が幾重にも重なり、見ごたえがある。その迫力や表情を再現するために試行錯誤した



2

白い紙の世界に奥行きをつくる

印刷の表現領域を広げて再現性を高めながら、「奥行き」を出すための検証を行った。カラージュの風合いと森本氏の世界観が、白い紙にいかにも現れていくのだろうか

白い紙に刷り、 カラージュの再現性を目指す

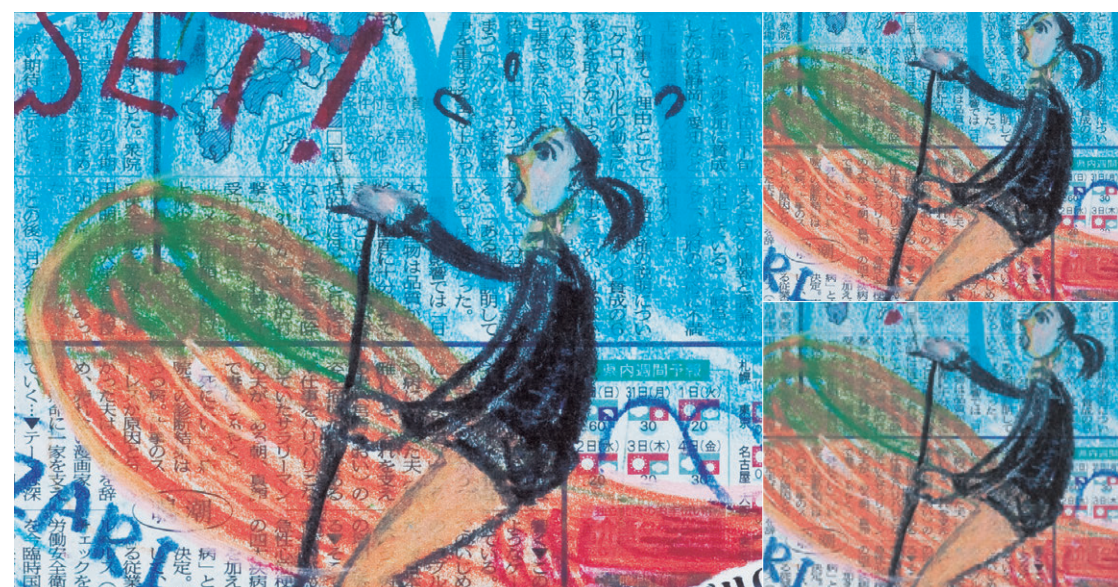
「1」の実験ではインキを重ねることでカラージュの積層感の表現を目指したが、個性の強い用紙を用いたため、印刷によって再現できる色域に限りが出てしまった。そこで印刷適性*5の高い白い用紙だけに候補を絞り、カラージュの再現性を最大限に高めることに。候補とした用紙はケンラン、アラベール、ヴァンヌーボV、ハイジेंटルの4種。ケンラン、アラベールは紙地の白が際立ち、刷り部分とのコントラストがよく出た。

ハイジेंटル
(ハイホワイト)

ヴァンヌーボV
(スノーホワイト)

アラベール
(ウルトラホワイト)

ケンラン(スノー)



クレヨンのにじみとした質感を再現する

カラージュの画材に多用されているクレヨン。クレヨンらしいしっとりとした質感を出すためにインキセットを検証。Kaleidoのプロセス各4色にマットニス*6を混入した。混入率0%、20%、50%で刷り、その差異を比較した。

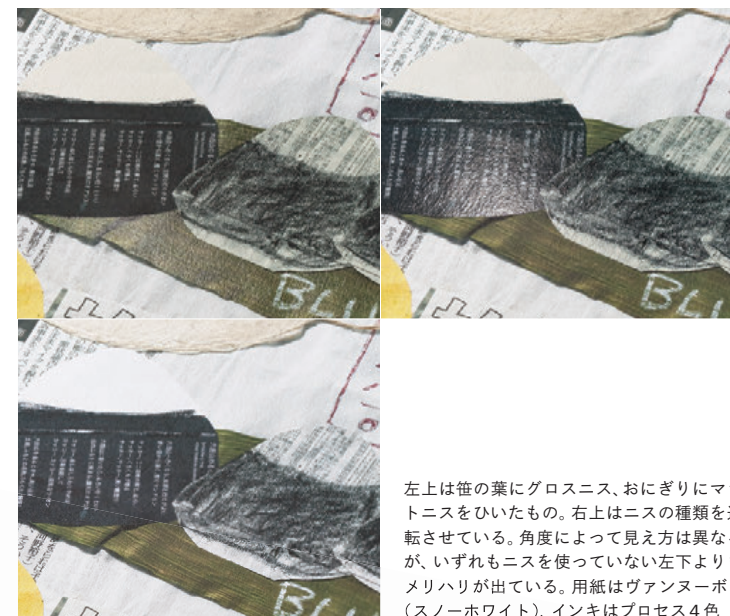
左は混入率50%、右上は20%、右下は0%。赤い部分を見ると分かるように、触れると手に色がついてしまいそうなクレヨン独特のマットな質感が出ている。新聞紙いっぱいに広がるクレヨンの画線の迫力も増した

*5 印刷適性 | 目的に合った高品質な仕上がりを実現するために、主に用紙に求められる品質のこと。印刷方式によって求められる印刷適性は異なり、オフセット印刷の場合、適度な吸水性、表面の強度などが求められる。

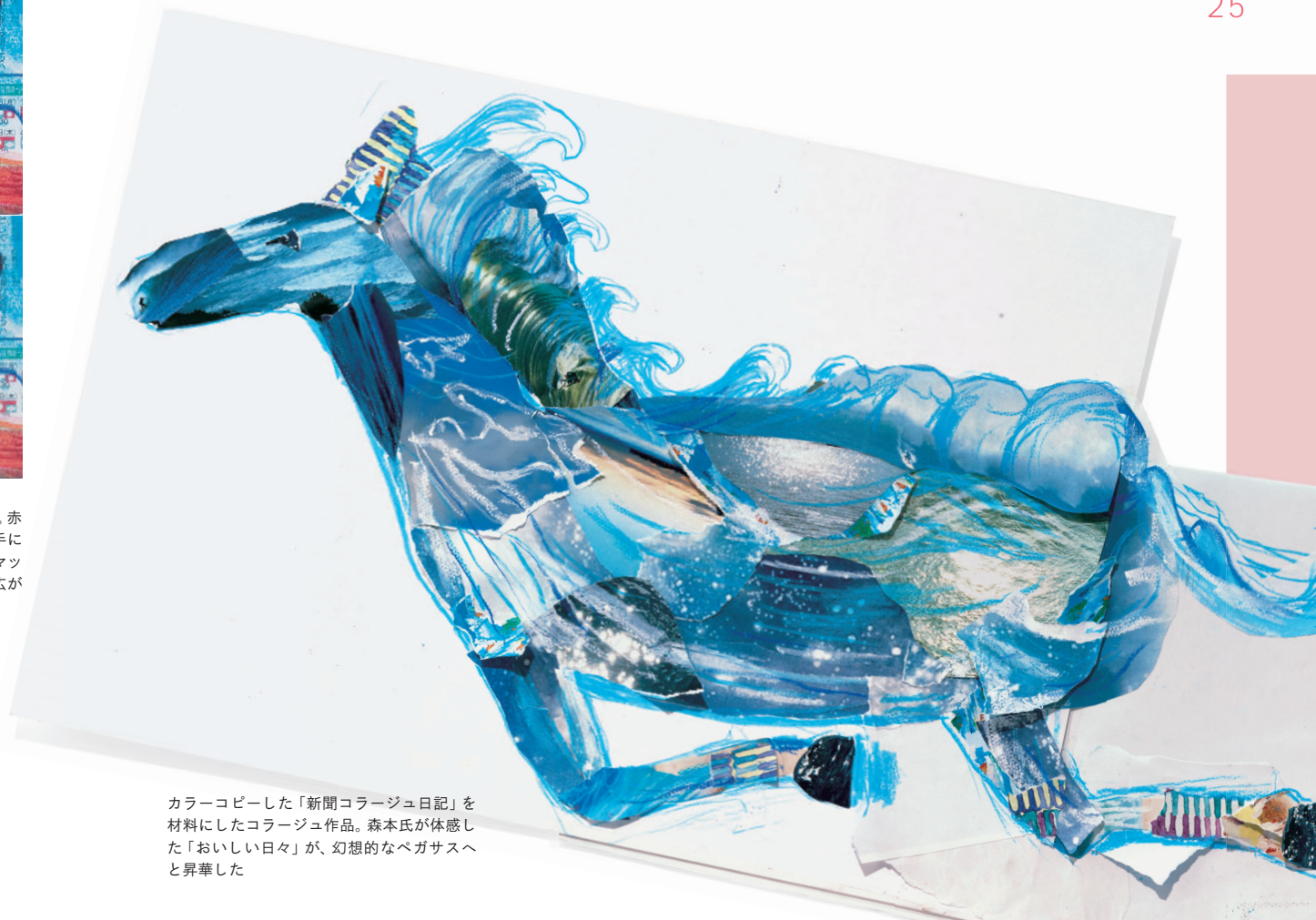
*6 マットニス | 印刷面にひくことで、ツヤを抑えたマットな質感へと変化させる。グロスニスと同様、印刷面を保護してキズがつきにくくなる効果がある。

グロスニスとマットニスの 差異と効果を確認

笹の葉に乗せたおにぎり。この重なり合うふたつのモチーフにそれぞれグロスニス、マットニスをひいて質感に差をつけ、奥行きを表現を狙った。笹の葉とおにぎりでのニスの種類を反転させ、見え方にどのような差異があるかを確認。おにぎりにグロスニスをひいたものはその部分が飛び出してくるような立体感が生まれ、奥行きが出ている。笹の葉にグロスニスをひいたものは地となる新聞紙と接するシャドウ部とのコントラストが付き、積層感が出た。異なる2種類のニスを使うことでそれぞれのモチーフの質感を引き立て、全体を俯瞰するとその部分に目が留まる。



左上は笹の葉にグロスニス、おにぎりにマットニスをひいたもの。右上はニスの種類を逆転させている。角度によって見え方は異なるが、いずれもニスを使っていない左下よりもメリハリが出ている。用紙はヴァンヌーボV(スノーホワイト)、インキはプロセス4色

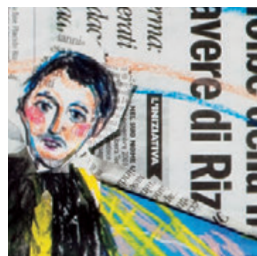


カラーコピーした「新聞カラージュ日記」を材料にしたカラージュ作品。森本氏が体感した「おいしい日々」が、幻想的なベガサスへと昇華した



GRAPHIC TRIAL 2012 "Graphic Trial" is an experiment to pursue the relationship between graphic design and printing expression in depth in order to acquire new expressions.

▲用紙 | ハイジェントル(ハイホワイト) 四六判 135kg
版の構成 | プロセス4色(マットニス20%混入)→
超光沢メジウム4回
※プロセス4色の刷り順はすべてブラック→シアン→マゼンター→イエロー



◀ コラージュのベースはイタリアの新聞紙、日本のものとは異なる新聞紙の素材感もよく出ている



GRAPHIC TRIAL 2012 "Graphic Trial" is an experiment to pursue the relationship between graphic design and printing expression in depth in order to acquire new expressions.

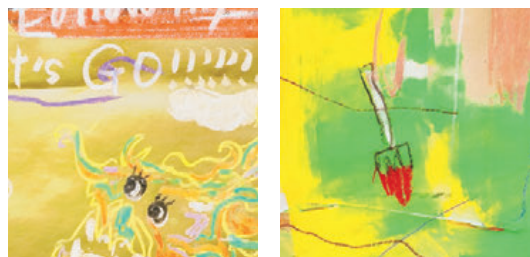
▲用紙 | ハイジェントル(ハイホワイト) 四六判 135kg
版の構成 | オpaqueホワイト→プロセス4色
(マットニス20%混入)→特色ブルー→特色グリーン→
超光沢メジウム4回



◀ テープの部分は超光沢メジウム(左)。テープと異素材の重なる部分では超光沢メジウムを4回刷りし、質感と立体感を出した(右)



GRAPHIC TRIAL 2012 "Graphic Trial" is an experiment to pursue the relationship between graphic design and printing expression in depth in order to acquire new expressions.



▲用紙 | オフメタル (銀) 四六判 130kg
 版の構成 | オペークホワイト3回→プロセス4色 (マットニス 20%混入)→金→特色レッド→特色蛍光イエロー→特色蛍光グリーン→超光沢メジウム→オペークホワイト

◀ シルバーの用紙にプロセス4色を刷り、金を再現した (左)。蛍光色の特色で鮮やかなグリーンとイエローを再現した (右)



GRAPHIC TRIAL 2012 "Graphic Trial" is an experiment to pursue the relationship between graphic design and printing expression in depth in order to acquire new expressions.



▲用紙 | ケンラン (スノー) 四六判 225kg
 版の構成 | プロセス4色 (Kaleido/マットニス20%混入)→超光沢メジウム4回

◀ 鮮やかな色味を出すためにインキはKaleidoを選択。マットニスを混入して質感を出した。超光沢メジウムを効果的に用い、奥行きや立体感を強調



GRAPHIC TRIAL 2012 "Graphic Trial" is an experiment to pursue the relationship between graphic design and printing expression in depth in order to acquire new expressions.



◀ モチーフに使われた材料の違いなど、超光沢メジウムで質感に差異をつけて積層感の表現を目指した

▲ 用紙 | ケンラン(スノー) 四六判 225kg
版の構成 | プロセス4色(マツニス20%混入)→
超光沢メジウム4回 → オベークホワイト

■ トライアルを終えて

いつものお仕事ではできないようなことに挑戦できる贅沢さに混乱してしまいました！このような恵まれた機会をいただけて、本当にうれしく思っています。

私は作品をつくるときに、フォトグラファーやイラストレーターなど、大勢のクリエイターの方々と同じ列車に乗ってゴールを目指すような感覚があります。トライアルを通じ、プリンティングディレクターもその列車に乗る一員として欠かせない存在だと感じました。今回担当していただいた渡辺さんのように、作品の意図を感じ取って確実に印刷表現に置き換えてくれるような、信頼できるプリンティングディレクターにサポートしていただくことはとても大切だと思います。

色味や質感の表現は、数値だけで測りきれない曖昧な部分があります。印刷の場合、プリンティングディレクターや印刷現場の方々の「見て感じ、印刷物というかたちにする」という工程が加わるので、私の作品でありながらどこか自分の手を離れたような、不思議な気分になります。人と人の「ご縁」が、作品に乗せた私の思いやかたちをみがき上げてくれるといったら分かりやすいでしょうか。そこにはいつも、自分のイメージをはるかに超えたものがあるのです。

森本千絵

■ プリンティングディレクターから

森本さんがプライベートで制作されている「新聞カラーズ日記」は、自由奔放で、なおかつ繊細さを併せもっていて、ありのままの森本さんがそこにいらっしゃるような印象を受けます。はじめて森本さんにお会いした日、これまでにつくられたカラーズをすべて見せていただきました。1点1点に広がる森本さんの世界観に、あつという間に引き込まれてしまいました。

これらを印刷でいかに再現するか。実物のカラーズを見たときの感動にどれだけ近づけられるか。それが印刷設計のポイントでした。カラーズによって用いられている素材や画材はそれぞれ異なります。一つひとつのモチーフや材料の風合いを再現するために、実物を見ながら製版技術者ととことん話し合っ版をつくり込み、印刷の段階ではインキの種類や混合の割合を微調整したり、刷り重ねたり……。カラーズ独特の立体感と森本さんの「思い」を表現しようと、これまでの経験と現場の力を結集させて作品をつくり上げました。

私は長年、印刷の仕事に携わっていますが、森本さんのおかげでオフセット印刷の可能性と豊かな表現力を、あらためて実感できました。

渡辺 孝

